Rise ライズ

労働者・兵士ともに起ちあがろう！

第64号

2022年 1月10日 発行

1部：100円

―自衛官との団結は職場の団結から始まる―

発行：労働者兵士行動委員会
URL： http:// www.rise-rou-hei.info/wp/　Email:rou_hei_rise@yahoo.co.jp　TEL 090-8961-0141
〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16　石田ビル４階　年会費：2000円　会員外年間定期購読料：1200円

巻頭言

世界危機は「戦争か、革命か」の時代

滝山猛師

コロナ危機下の２年間でより鮮明になっているのが帝国主義の最後の延命形態である新自由主義の総破産だ。そして今帝国主義とスターリン主義の戦後体制が崩壊し、その全矛盾が米日帝国主義の中国侵略戦争として爆発しようとしている。

時代の基調は、第一にコロナ×大恐慌情勢下での新自由主義の総破産と米帝の没落の深まりだ。第二が中国スターリン主義の経済的軍事的台頭と国内危機という矛盾の拡大である。第三にインド・太平洋地域をめぐる米欧日帝国主義の新植民地化をめぐる争闘戦の激化だ。争闘戦は東中国海・南中国海・台湾問題で軍事化し、激化している。第四にこれらに規定された「最弱の環」・日帝岸田政権の改憲と軍大化を軸にした戦争国家化への突進である。これが現在、進行している事態だ。２０２２年の階級闘争は、《中国侵略戦争阻止、安保粉砕・日帝打倒！世界の闘う労働者人民との国際連帯を強化しプロレタリア世界革命へ！》が基調となる時代である。

社会と国家は崩壊している

新自由主義を打倒しなければ労働者民衆は生きられない、というところにまで社会は崩壊し、国家（政治家と官僚ども）も崩壊している。それを端的に示したのが森友訴訟に対する国の「認諾」という訴訟終結方法だ。赤木雅子さんが「ふざけるな！」と腹の底から怒りを表明しているのは当然だ！新自由主義とその国家を根底から打倒しなければ労働者民衆は生きられない。自殺が急増し、「生きられない」という怒りは巷に渦巻いている。岸田の「新しい資本主義」というペテンも見抜かれている。

新自由主義は打倒できる。社会を動かし、生活に必要なモノを生産しているのは労働者だ。資本家ではない。一握りの財閥や軍閥、資本家などが儲けるための生産はストップし、民衆の生活に必要不可欠なモノだけの生産に絞り込めば環境破壊にも制動がかかる。これらすべてを決定するのが労働者だ。労働者こそが社会の主人公であり、決定権を握っている。それは選挙や議会で決まるものではない。労働者の職場・地域での階級的労働運動と実力闘争で決めるのである。それが改憲と戦争をも阻止する政治闘争の土台だ。帝国主義ブルジョアジーを打倒する暴力革命への土台でもある。そして労働者には国境はない。国境を越えて団結し、世界単一の労働者党を建設し、そこに結集できるのがプロレタリアートである。世界革命はプロレタリアートによってしか実現できないのである。

今、必要なのは革命への行動

没落米帝には中国を米帝の世界秩序の中に取り込む力はすでに持ち得ていない。米帝はその現実を戦争（核戦争）で突破しようとしている。全てはその現実に規定されてアジア・欧州・中東など世界で新たな激動が始まっている。それはどこに向かうか。「戦争か、革命か」だ。人類の世界史的選択である。労働者人民・兵士にとって前者は地獄への道、後者は人間として生きる解放への道だ。帝国主義とスターリン主義を打倒し、プロレタリア世界革命へ！共に行動し、進撃しよう！

22年 復帰50周年 5・15沖縄現地闘争に決起しよう！

在本土沖縄労働者会議　宮里勝博

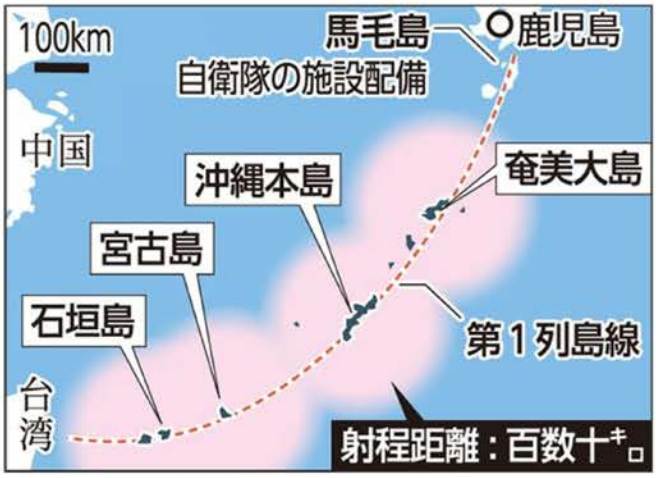
「改憲・戦争への道」を突き進む岸田政権打倒！

21年4月、日帝はバイデン－菅の日米首脳会談における共同声明で「改憲・大軍拡」へと加速した。日帝岸田政権は米帝の要求に応える形をとりながら、中国侵略戦争を戦いぬく体制を進めている。

それは防衛補正予算の過去最大7738億円であり、なによりも9月～11月の陸自10万人を動員した大規模演習・自衛隊統合演習で陸海空自衛隊3万人に米軍6千人が初参加し、水陸機動団による離島上陸作戦や対艦攻撃訓練、米軍演習場での実弾射撃訓練、民間港湾も軍事利用した輸送訓練を強行した政策に表れている。さらに沖縄・奄美をはじめとした琉球弧の軍事拠点化、自衛隊ミサイル部隊や電子戦部隊の配備も進められている。

日帝岸田政権打倒なしには「改憲・戦争への道」を止めることはできない。コロナ禍での「軍拡」を止めるのは労働者・労働組合の団結の力だ！岸田政権打倒の闘いに決起しよう！

南西諸島への地対艦ミサイル部隊配備



ミサイルがやってきた！既成事実に屈しない住民運動

21年11月14日、自衛隊輸送艦「しもきた」が、宮古島にミサイルを輸送してきた。宮古島平良港下崎埠頭には「ミサイル基地いらない」の住民団体20人余が抗議行動を展開した。警察・港湾職員がこれを阻止するように取り囲んだが、住民団体はゲートに立ちはだかり阻止した。

ミサイル搬入は阻止できなかったが、「既成事実に屈しない」住民運動の力は「継続は力なり」ということを示している。抗議行動は埠頭から千代田自衛隊基地、保良弾薬貯蔵庫までの約20キロ続いた。また、抗議は「警備」と称した抗議行動排除を港湾職員に指示した座喜味市長にも向けられた。座喜味市長は港の使用申請を「苦渋の決断だ。許可やむなしだ」と発言した。「ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会」から「自衛隊基地反対」の公約はどうなったかと弾劾された。既成政党には頼らない、運動姿勢こそが重要だ。

21年1月26日、八重山の八重

岳山頂付近で第十五旅団通信隊が情報通信訓練を予定していたが、その部隊の演習予定地の山頂手前付近で、「八重岳の自衛隊演習許さない！」「自衛隊帰れ！　人殺し訓練やめろ！」と書いたプラカードを持ち、立ちふさがった反対派市民約20人に道路を封鎖され、その訓練は中止となった。自衛隊は22年度末には自衛隊員派遣をもくろんでいるが、住民運動は既成事実に屈しない姿勢を貫いている。宮古・八重山の地元住民の体を張った阻止・抵抗闘争は不屈に続けられている。米日帝の中国侵略戦争を阻止する最先端の攻防地だ。本土ー沖縄の労働者階級が分断・差別を許さず一体となった反戦反基地闘争をつくり出し、改憲、戦争への道を突き進む岸田政権を打倒しよう。

弾薬庫が設置されている陸上自衛隊宮古島駐屯地

この一連の行動で一番「緊張」していたのは自衛隊隊員だ。行動・言動の一挙手一投足がマスコミにとりあげられ、批判・弾劾ばかりで、「賛美」の声がないからだ。あるのは上司の命令だけだ。「こんなこと」で自衛隊に入ったわけではない。ましてや「戦争する」ために入ったわけではないからだ。自衛隊の南西拠点化阻止・「台湾有事」を許さず、全国各地で岸田政権打倒！反戦反基地闘争を取り組もう。自衛隊の侵略軍隊化の中で「軍服を着た労働者」である自衛隊員の苦悩と怒りは自衛隊員の「事件」として頻発しており、反軍闘争を闘い、階級的労働運動の力で自衛隊員を労働者階級の隊列に獲得しよう。

22年復帰50周年5・15沖縄現地闘争に決起しよう！

72年5・15から50年、沖縄県民が願った「核も基地もない平和な沖縄」は星野・奥深山・大坂さんが連帯して闘ってから半世紀を経た今でも米日帝の巨大な軍事基地で島全体が再編強化されようとしている。

米日帝の中国侵略の最前線で闘いを阻止しよう。沖縄ー本土労働者・労働組合は現地闘争に決起しよう。反戦・反基地闘争爆発の風は吹いている。時代はわれわれの登場を待っている。

～～～～～～～～

宮古島に行くならここへ！

上野野原にある戦争を詠った歌碑。「補充兵われも飢えつつ餓死兵の骸（むくろ）焼し宮古（しま）よ八月は地獄」は一九四三年に補充兵（衛生兵）として宮古に召集された高沢義人さん（九五歳。千葉県在住）の碑が千代田自衛隊基地の近くにある。

～～～～～～～～

チッソ（日本窒素肥料）は巨大な戦争犯罪をも犯していた

十亀弘史

昨年、『ミナマタ』に続いて、『水俣曼荼羅』などの映画が公開され、あらためて、水俣病は過去ではないという認識が喚起されました。10月3日の朝日新聞は、「現在、感覚障害が確認されながら患者認定されない『被害者』は約7万人」と報じています。しかも、被害の全体像が明らかになれば、国とチッソの負担が増すため、認定基準や健康調査をめぐって国の「不作為」が続いている、というのです。3・11による被曝や「黒い雨」被爆についての、国や東京電力の卑劣な不作為と同じであり、強い怒りにとらわれます。

ただここでは、チッソの前身である日本窒素肥料が、戦前・戦中に犯していた巨大な犯罪を明らかにしたいと思います。山本義隆著『近代日本一五〇年』（岩波新書）によりますが、日本窒素肥料（以下「日窒」）は、1927年、朝鮮に子会社・朝鮮窒素肥料を設立し、鴨緑江の電源開発をベースにして、（現在の朝鮮民主主義人民共和国・）に、「電力と化学工業を結合させた巨大コンビナートを建設」します。窒素は多種の火薬の原料ともなりますから、コンビナートはそのまま大規模な爆薬工場となっていました。日窒は、軍の力を背景に、土地を奪い、資源を奪い、さらに建設した工場群の全域において、朝鮮人・中国人労働者を危険で苛酷な労働に駆り立て続けました。日窒は日本の国防産業の中枢を担うと同時に、朝鮮において極めて暴虐な侵略の先兵となっていたのです。

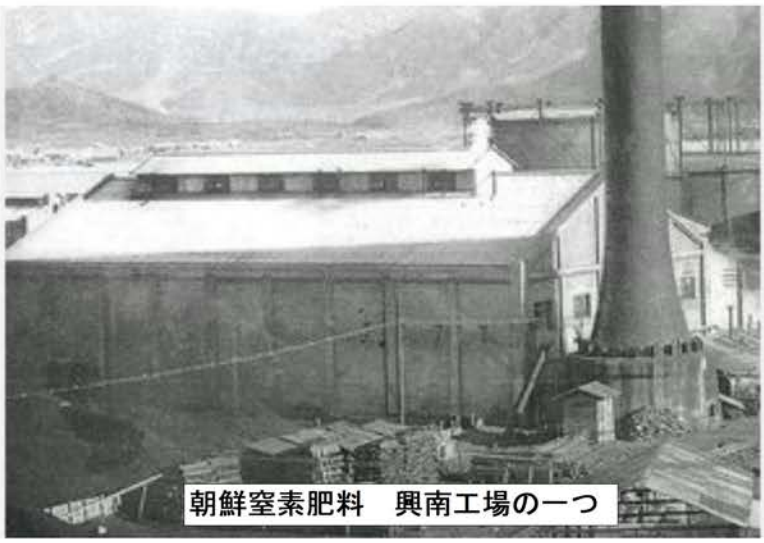
その具体的な様相を、写真家の伊藤幸司氏が、現地での取材をもとに、「水銀中毒から原爆開発まで・・・“水俣病”の原因企業『チッソ』が北朝鮮で行っていたこと」と題して、ウエブ雑誌の『現代ビジネス』（講談社、2021・10・15号）にレポートしています。

日窒の工場群の現場では、朝鮮人に対して、例えば次のような「非人間的・差別的な扱い」が行われていました。「工作機械工場ではベルトに手足を巻き込まれる事故が毎日のように起き、死亡することも多かったんです。しかも

朝鮮窒素肥料　興南（フンナム）工場の全景

ケガをすると、工場から追い出されました。ひどいのは、マグネシウム生産工場ではガスの中で働くのに、マスクをすることができたのは日本人だけだったことです！」（朴斗満さんの証言）。日窒の労働現場では、そのような死傷者が絶えませんでした。

さらに日窒は、「水俣病より前に、興南工場で有機水銀中毒による『興南病』を引き起こして」いたのです。「従業員の間で“奇病”発生の噂があり」、石原信夫医師によれば「工場でのアセトアルデヒド生産量や、そのための水銀消耗量と有機水銀の副生量は水俣以上であり、有機水銀中毒発生の危険性は水俣を上回っていた可能性がある」ということです。労働者や住民の健康や命をまったく顧みないこの企業体質が、戦後にそのまま引き継がれています。


朝鮮窒素肥料　興南工場の一つ

それらの上で、真に驚くべき事実として、日窒は、原子爆弾のための核開発にも着手していたのです。工場で働かされていた尹昌宇さんも、「表向きは肥料工場となっていましたが、爆薬だけでなく核兵器の製造に使われる物質を大掛かりに製造しようとしていました」と語っています。

伊藤氏の記事は、さらに、『世界が隠蔽した日本の核実験成功』（矢野義昭著・勉誠出版）を引用して、興南沖合の小島で小規模な核爆発実験が行われた可能性にも触れています。同書は、副題に「核保有こそ安価で確実な抑止力」とあるように、決して許せない主張を含む一冊ですが、図書館で目を通してみました。ソ連軍の占領直前の１９４５年８月12日に行われたという「核実験」の存在については、相当に疑わしいと感じました。ただ、米国国立公文書館の「最高機密」文書を調査した研究者は、興南が日本の核開発の中心地をなしていたとしています。「興南ではウラン鉱石の精錬も重水の製造もできた」のです。あるいは、50年10月26日付けの「ニューヨーク・タイムズ」には、朝鮮戦争中に、「韓国軍が興南郊外でウラニウム処理プラントを発見した」との記事があり、他にも同内容の海外の報道が少なからず存在します。

戦前・戦中に日本が、陸軍の「二号研究」と海軍の「F研究」を通して、原爆を開発しようとしていたことは周知の事実です。そしてウラニウム採掘は朝鮮半島でも行われていました。興南の軍事工場群はウラン供給地に近接していたし、豊富な電力を有していました。必然的に原爆開発の重要な拠点になっていたのです。

伊藤氏は「『日本窒素肥料興南工場』で、核開発がおこなわれていたのは間違いないだろう。にもかかわらず、そのことは戦後の日本で問題にならなかった。それは、朝鮮戦争へさまざまな形で“参戦”して多くの死者を出したこととおなじように、『平和国家・日本』にとって“不都合な真実”だったからだろう」としています。

現在、あらゆる意味で「採算」のとれなくなっている原発に、日本の支配層がなお固執しているのは、疑いの余地なく、将来的な核兵器の獲得を動機としています。日米帝国主義による中国侵略戦争の切迫を前に、防衛費の６兆円超えや、敵基地攻撃能力の検討など、戦後政権で軍事的に最も突出しているのが岸田政権です。その政権あるいはその先の日帝支配階級に、核兵器の開発で寄り添おうとする資本が登場することなど絶対に許してはなりません。日窒・チッソは、戦前・戦後を通して、真に暴力的な帝国主義資本としての実態を少しも変えませんでしたが、他の資本も本質は同じです。新たな侵略戦争とその準備を阻止するためにも、チッソの歴史をとらえなおすことには意義があります。闘う労働者の力で、侵略戦争を必然とする帝国主義を打ち倒しましょう。

池田自衛隊裁判「上告棄却判決」徹底弾劾！

東京西部ユニオン（元自衛官）　杉橋幸雄

●「使い捨て・切り捨て」は絶対に許さない！

21年11・7全国労働者総決起集会直後の11月12日、最高裁第二小法廷（草野耕一裁判長）は池田頼将・元3等空曹の国家賠償請求裁判において、原告の訴えを退ける「上告棄却判決」を下しました。絶対に許せません！この攻撃は、米中対立の戦争的激化の下で日米安保を一層強化し、「台湾有事」に構える帝国主義軍隊・自衛隊の「負傷隊員の切り捨て・使い捨て」の本性を示すものであり、労働者・兵士の団結破壊を意図した改憲・戦争国家化攻撃と一体の攻撃です。それは、1億円の賠償金を払っても急遽幕引きを図ろうとした「森友訴訟」の攻撃と本質的に同じだと思います。国・自衛隊こそが労働者民衆の闘いに追い詰められている証拠です。あきらめずに闘い抜けば事態は必ず切り開かれると確信しています。11・7全国労働者総決起集会で提起された「闘う労働組合の全国ネットワークをつくろう！」「新自由主義を終わらせる労働運動の再生を！」「改憲・戦争阻止！岸田政権を打倒しよう！」の闘いと一体となり、国際連帯の立場で断固闘い抜けば勝利の地平は必ず切り開かれると確信しています。池田さんと共に決着をつけるまで闘っていく決意です。

●池田さんの闘いをふり返る

（詳しくは『Ｒｉｓｅ第61、62、63号巻末』を参照）

池田さんは２００６年４月、憲法違反のイラク侵略戦争に通信兵として動員され、現地米軍主催のマラソン大会参加中に民間軍事会社の大型バスに跳ね飛ばされて大怪我をしました。問題は、同大会への参加を推奨していた自衛隊が具体的な安全対策を一切行っていなかったことです。明白な安全配慮義務違反です。ところが現地で

2015.06.12 #雑誌

どう考えても普通じゃない
なんと自殺者54人！　自衛隊の「異常な仕事」

週刊現代　講談社　毎週月曜日発売

プロフィール

問題は何も終わっていない！
―イラク帰還隊員の自死やPTSDの激発を知らせる2015年当時の週刊誌

週刊朝日　2015年8月15日号

◁ イラク派遣隊員29人が自殺　帰還隊員らが語ったPTSDの恐怖

サマワの宿営地に入る自衛隊（2004年）

は適切な治療が行われず、負傷した池田さんは任務終了まで現地に留め置かれました。そして、06年8月25日に帰国し、直後の28日に小牧市民病院の整形外科を受診。「顎部捻挫、左肩挫傷」でした。顎関節の痛み、頭痛、体のシビレや不眠症もひどく、9月からはリハビリのための整形外科と神経科にも通院し始めました。医師からは「反復心因性うつ病、不眠症」と診断されています。しかしそれでも、勤務時間内の通勤が認められず、通院はいつも勤務終了後でした。そうした不当な扱いが池田さんの症状を悪化させたのです。

両顎の関節がズキズキ痛み、口を開けられない状態の池田さんは、同年9月11日、小牧市民病院・口腔外科を受診。「外傷性顎関節症」と診断され、医師から「何故、もっと早く受診しなかったのか」と厳しくとがめられています。「勤務時間中の通院」が許されたのは池田さんが通院していた浅野医院の医師が自衛隊に「特別の配慮」を要請したことによって、ようやく「勤務中の通院」が可能となったのです。自衛隊のこうした理不尽な扱いが池田さんの病状を一層悪化させ、後遺症をも残した原因です。

自衛隊はしだいに池田さんを「厄介者扱い」するようになり、公務災害給付は途中で打ち切られ、揚句、部下からの暴行を契機に通信隊から庶務班に強制異動され、完治しないままパワハラ・退職強要で除隊を強いられたものです。絶対に許せません！

こうした自衛隊の理不尽に対し、池田さんは国・自衛隊に国家賠償請求の裁判を起こして必死で闘ってきました。これに対し国家権力は監視体制を強化し、その決起と運動を潰そうとしてきました。しかし、池田さんは闘う労働組合や良心的市民の方々と団結して裁判闘争を闘ってきました。今回、最高裁で「上告棄却判決」が下された訳ですが、これで全てが決まった訳ではありません。

●人類の生き方・在り方が根本的に問われる時代

コロナ×大恐慌情勢の下で新自由主義の根底的破綻・地球温暖化が世界的に明白となり、人類の生き方・在り方が根本的に問われています。経済成長ではなく誰もが人間らしく生きられる社会を求めています。しかし、世界の資本家階級は自力でこの社会を根本的に改めることはできません。そうした力を持っているのはこの社会を動かしている名もなき労働者階級です。それを歴史的に証明したのがロシア革命です。後にスターリン主義に変質し、崩壊してしまいましたが、世界の労働者民衆は現代社会の矛盾に気づき、国境を越え、民族の違いを乗り越えて社会の根底的変革・革命を求めて闘いだしています。国家権力の弾圧によってその闘いは一筋縄ではいきませんが、闘いは香港・ミャンマー・沖縄をはじめ全世界に広がりつつあります。それ故に、岸田政権は「脱炭素」を掲げ排外主義を煽り、改憲・戦争への道に労働者・兵士を引きずり込もうと必死です。世界を巻き込んだ米中対立が戦争的に激化している今こそ、岸田政権を打倒し、新自由主義を終わらせなければなりません。国際連帯のもと階級的労働運動を断固押し進める中にこそ勝利の道があります。団結して前進しようではありませんか。

●自衛官は「戦争の駒」にはならない！

自衛官は「戦争の駒」ではありません。血の通った生身の人間であり、労働者の一員です。帝国主義軍隊・自衛隊はあくまで資本家階級の階級的利益を「国益」として押し出し、自衛官を戦場にかりだし、資本家階級のために殺し合いを強制します。しかし、それは破滅の道です。にもかかわらず、岸田政権は排外主義を煽り、「台湾有事」を叫び立て、防衛費の2倍化、敵基地攻撃能力の形成や宇宙からの監視に力を入れ、あくまで改憲・戦争国家化に突き進んでいます。戦争動員と「上告棄却」は一体であり、軍服を着た労働者（自衛官）に対する搾取・収奪・分断攻撃の極みに他なりません。それ故、支配階級にとって「負傷兵士」は戦力と見なされず、たちまち「お払い箱」として排除します。それは一般社会も同じです。こうした差別と排外に満ちた階級社会を、国境を越えた労働者・兵士の団結で根底的に覆すことこそ人間的自己解放の道です。自衛官とその家族の皆さん、そして池田さん！22年も団結して共に闘い抜きましょう！

池田自衛隊裁判

［連載　第4回］

作・ヤナギ イッセイ

「池田自衛隊裁判」上告棄却徹底弾劾！しかし、自衛隊（帝国主義軍隊）が解体されない限り、この闘いは続きます。「池田自衛隊裁判」の意義は大きく、連載は継続します。（編集部）

⑨ 通院証必要なら「うつを治せ」と指示

自衛隊は公務災害認定手続きを怠り、海外保険」で対応させてきましたが、それも06年12月末で終了。池田さんは翌年1月からはリハビリの通院も思うようにできなくなります。

勤務時間中の通院には、公務災害認定が必要です。池田さんは自衛隊から通院証を発行してもらうため、整形外科と精神科作成の診断書を、上司の西塚二尉に提出します。しかし「反復心因性うつ病、不眠症」の診断書に上司は怒り、「うつを治せ」「医者にうつは完全に治ったと診断書を書いてもらえ」と迫ります。

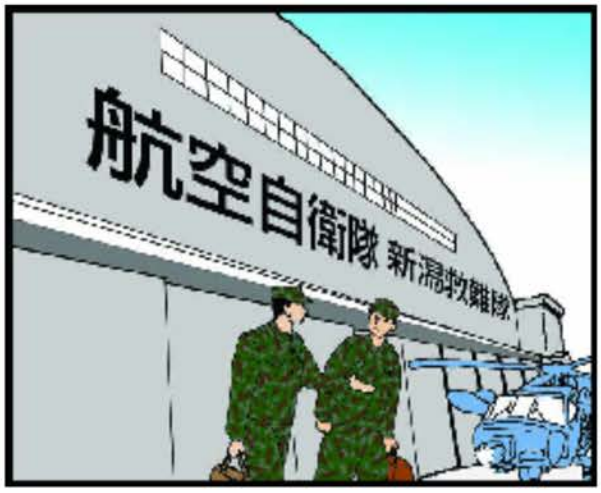
⑩ 医師に「不眠症は治った」とウソ

やむなく池田さんは、精神科でウソをつくことになります。「あごは公務災害が認められ、その後はよく眠れるようになりました」と医師に告げます。カルテには「心因性うつ病、不眠症完治する」と記載されます。

ところが、この「ウソのカルテ」を自衛隊に提出したことで、今度は小牧市民病院精神科に通院治療できなくなります。池田さんは公務災害認定も受けていません。PKO保険終了も迫り、治療費の自己負担に強い不安がありました。とてもうつが治ったと言える状態ではなかったのです。

⑪ 新潟救難隊へ異動後もつづく不安

07年3月20日、池田さんは新潟救難隊通信室へ異動が命じられます。

4月20日新潟大学医歯学総合病院の顎顔面外科を受診。事故発生から約11カ月経った5月31日、やっと公務災害の認定がされました。

08年6月27日から7月28日まで、新潟大学病院であごの両側関節円盤切除の手術。退院後もすぐに職場復帰を命じられ、通信室係長石塚空曹長は池田さんに「すぐに出勤せよ」「早めに戻ってこい」と速やかに仕事に就くよう求めます。不眠や動悸、不安が広がり、8月24日にパニック発作で救急受診。11月には新潟大学病院の精神科を受診し、通院を始めました。（次号へつづく）